



19年で83名の研究者が支援した次世代向け教育プログラム「地震火山こどもサマースクール」

サマースクールの根本理念

- 1) 研究最前線の専門家が子どもの視点にまで下り、地震・火山現象のしくみ・本質を直接語る
- 2) 災害だけでなく、災害と不可分の関係にある自然の恵みを伝える

当初の狙いをこえた成果

- 1) 子どもたちの自由な発想に専門家が教えられた
- 2) 自然の災害と恵みの理解を深めることが地元愛に繋がった
- 3) サマースクールのプログラムを地域活動に生かした開催地もできた
- 4) 専門家と接することがキャリア教育に繋がった
- 5) 卒業生の中にはスタッフとして参加する者もできた(人材発掘)



日程	プログラム	開催地	参加者/スタッフ
1999年8月20-21日	第1回 「丹那断層のひみつ」	静岡県函南町など	22/19
2000年8月26-27日	第2回 「有珠山ウォッチング」	北海道杜町、虻田町など	59/21
2001年7月20-22日	第3回 2001地震火山世界こどもサミット	東京都・大島町、三原山など	163/63
2003年8月2-3日	第4回 「活火山富士のひみつ」	静岡県富士市、富士山など	25/34
2004年8月7-8日	第5回 「Mt. Rokkoのナゾ」	神戸市、六甲山など	21/51
2005年8月19-20日	第6回 「霧島火山のふしぎ」	宮崎県都城市、霧島など	23/22
2006年8月12-13日	第7回 「湘南ひらつかプレートサイド物語」	神奈川県平塚市、松田町など	31/43
2007年8月4-5日	第8回 「箱根ひみつたんけんクラブ」	神奈川県箱根町、小田原市	30/43
2008年8月23-24日	第9回 「都(みやこ)をつつた盆地のなぞ」	京都市	25/55
2009年8月8-9日	第10回 「火山が作った維新のまち・萩の景色のひみつ」	山口県萩市	37/44
2009年11月28-29日	— 地震火山こどもフォーラム	東京都	65
2010年8月7-8日	第11回 「室戸ジオパークを610倍楽しむ方法」	高知県室戸市	29/44
2011年8月6-7日	第12回 「磐梯山のお宝さがし」	福島県会津・磐梯山	21/47
2012年8月18-19日	第13回 「東と西に引き裂かれた大地のナゾ」	新潟県糸魚川市	33/50
2013年8月3-4日	第14回 「南から来た大地のものがたり」	静岡県伊豆半島	33/45
2014年8月2-3日	第15回 「島原半島に隠された九州のヒミツ」	長崎県島原半島	21/38
2015年8月2-3日	第16回 「まくれあがった大地と中央構造線のナゾ」	長野県伊那市など	26/43
2016年8月20-21日	第17回 「南紀熊野の海と山のヒミツ」	和歌山県串本町など	38/60
2017年8月9-10日	第18回 「熊本地震で見つけた大地のヒミツ」	熊本県益城町	28/53
2018年8月7日	第19回 「火山島 伊豆大島のヒミツ」	東京都・大島町、三原山など	34/55

大学・研究機関関係 参加講師
(合計83名=複数回参加で延べ154名)
京大(14)、名古屋大(6)、東大(6)、産総研(6)、日大(4)、熊本大(3)、静岡大(3)、防災科研(3)、北大(2)、山口大(2)、高知大(2)、九大(2)、富士常葉大(2)、神奈川県博(2)、茨城大(1)、慶応大(1)、早大(1)、千葉大(1)、電中研(1)、東北大(1)、奈良教育大(1)、新潟大(1)、フォッサマグナミュージアム(1)、福島県博(1)、福島大(1)、妙高火山研(1)、温地研(1)、広島大(1)、佐賀大(1)、砂防・地すべり(1)、桜美林大(1)、鹿児島大(1)、首都大(1)、秋田大(1)、神戸大(1)、鳥取大(1)、東京海洋大(1)、北翔大(1)、立命館大(1)、和歌山大(1)、阿蘇火山博(1)、アジア航測(1)

19年の継続で、
83人の研究者が
参画

699人の参加者は、各地での担い手へ



ナイスな質問やコメントでカードGET

第19回地震火山こどもサマースクール 「火山島 伊豆大島のヒミツ」

開催日 2018年8月7日(火)
主催：第19回地震火山こどもサマースクール実行委員会(伊豆大島ジオパーク推進委員会、大島町、大島町教育委員会、公益社団法人日本地震学会、特定非営利活動法人日本火山学会、一般社団法人日本地質学会。実行委員長：三辻利弘 大島町長)
台風13号接近のため、予定していた二日間の日程を変更。8日のプログラムを中止とし、7日だけの日帰りで実施した。小・中・高校生の参加者33人は、大島町職員が中心となったサポーターと一緒に縦割りチームを結成。フィールドワークや実験、専門家によるお話とてんこ盛りのプログラムには秘密を解き明かすヒントが隠されていた。最後の発表の後、参加者は大島町長から「伊豆大島ジオパーク こどもマスター」に認定された。
また、台風の影響で大島に渡れなかった益城町の中学生1人は、東大地震研究所やそなエリアを見学、竹芝桟橋では、島から戻った講師と実験プログラムに取り組んだ。

「火山島 伊豆大島のヒミツ」の発表の様子



「こどもたちの元気をもらいました」(東大地震研究所 森田祐一)

驚くべき発想力。すべて、本質的で重要な視点・・・たじろぎました。(産業総合研究所 寒川旭)

大変、素晴らしい経験ができた。大学研究者も、子供たちと相互に学びあう姿勢が必要だ。(東京海洋大 木村学)

その時、こどもたちが残してくれたことばに「一人の百人力より百人の一人力」というのがあります。身の回りの自然について恵みも含めて学ぶことは、人間を謙虚にし、自然への畏敬の念が生まれ、知らず知らずのうちに防災への基本姿勢が備わるということを実感した瞬間でした。(名古屋大 武村)

2017年の益城町参加小学生、大活躍



「益城の大地ジュニアマイスター」に認定された小学生は、その後の地震学会巡検や、国の天然記念物認定に向けた文化審議会の現地視察で、地表に現れた断層露頭「潮井水源」の案内に大活躍しました。



観て 触って 感じて
いつも見えてた景色が違って見えた？！



大人は口出し禁止！！
こどもたちは発想力、想像力、考える力を大いに発揮する



1986年の噴火の経験を語る
こどもたちもビデオにきぎ付け！

19年間続けて こどもたちから出てきた言葉は
サマースクールの財産！！

知識を持つことで対策を考えることができるようになるため、住民一人一人が地元の自然環境を理解することが必要。(2017年参加者)

地震のことを知る、伝えるために博物館やテーマパーク作りに取り組む。一人ひとりが地域で地震のことを、益城のことを知る・伝える・考えることを大切にする。(2017年参加者)

地球科学は、私たちがこの星で幸せに暮らしていくための大切な学問だと知りました。(2001年参加者)

噴火が友達になった(2018年参加者) 次の噴火に備えようと思った。(2018年参加者)

噴火は今まで悪いイメージだったけれど、噴火してもいいことがあるんだなと思いました。(2018年参加者)

噴火は怖いだけかと思ったが、そうじゃないと知った。(2018年参加者)



専門家が徹夜で考えたアイデア実験
こどもたちの歓声に大人は思わずガッツポーズ

地震火山こどもサマースクールの運営体制

- ・こどもサマースクール3学会連合企画委員会
地震・火山・地質の3学会の担当理事らが、開催地を公募し、実施場所を決定する。(火山学会は学校教育委員会担当理事、地質学会は社会貢献担当業務執行理事ら)
- ・こどもサマースクール運営委員会
3学会を中心に、継続的に参加するスタッフによる実務委員会。本番の外部スタッフの主力となる。
- ・日本地震学会普及行事委員会
幹事学会として上記の枠組みを支え、Webサイトも管理。